

NyoNyum

「この国」を伝える。カンボジア生活情報誌「ニョニユム」
Cambodian Life Navigation in Japanese and English

ញីញីម

104th

Dec 2019 / Jan 2020

<https://nyonyum.net>

Take Free!!
Map & Coupon 付



水とともに生きる

～ 「みんなのための水」の実現のために～

水とともに生きる

～「みんなのための水」の実現のために～

みなさんは、プノンペンの水を直接飲んだことがありますか？
アセアン諸国では水が直接飲めるのはシンガポールだけと言われてきましたが、
実はカンボジアの首都プノンペンの水は直接飲める水質基準に達しているんです。

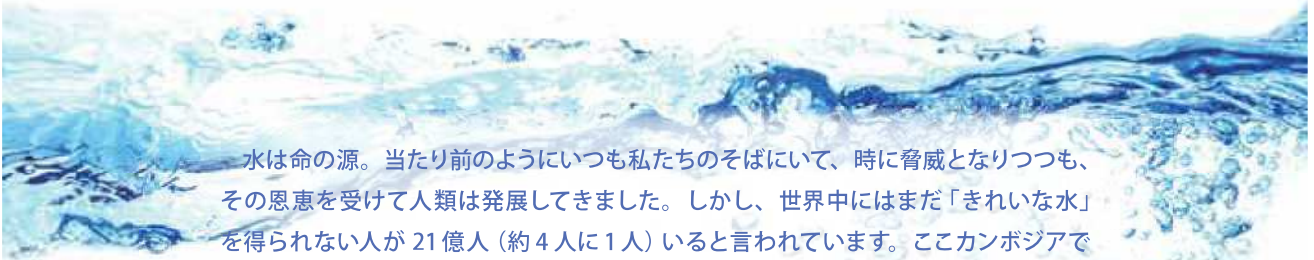
長い内戦で破壊しつくされたカンボジアのインフラ。
その中でも人々の生活に欠かせない水をすべての人たちに届ける。

その思いを実現させようと、カンボジア・日本が一丸となって
復興・開発に取り組んできました。

その軌跡を追います！



「きれいな水」を みんなに届けたい



水は命の源。当たり前のようにいつも私たちのそばにいて、時に脅威となりつつも、その恩恵を受けて人類は発展してきました。しかし、世界中にはまだ「きれいな水」を得られない人が 21 億人（約 4 人に 1 人）いると言われています。ここカンボジアでも「きれいな水へのアクセス」は、国家の最重要課題として位置づけられているんです。

国連が定めた「持続可能な開発目標 (SDGs)」では、17 のゴールの中の1つとして、「安全な水とトイレを世界中に」が定められている。カンボジアでは、「国家戦略開発計画 (National Strategic Development Plan)」で安全な水へのアクセスを向上させることを国家目標として掲げており、SDGs 達成に向けての取り組みがスタートしている。

この取り組みの先駆者として、プノンペンの水が注目される。「プノンペンの奇跡」と呼ばれるプノンペンの「安全な水」の実現は、さまざまな苦労を経て達成された。それは、日本をはじめとする国際援助によるインフラ整備、そして北九州市上下水道局の 20 年にわたる協力の賜物だ。何よりも、当事者であるカンボジアの水道に関わる人々の熱意があつてこそのこと。その歴史を作ったプノンペン水道公社 (PPWSA) で陣頭指揮を執ったアェク・ソンチャン前 PPWSA 総裁は、2006 年にアジアのノーベル賞といわれる「ラモン・マグサイサイ賞」を受賞。また、PPWSA は 2010 年に世界の優れた水管理への取り組みを顕彰する「ストックホルム産業水大賞」に選ばれている。



持続可能な開発目標 SDGs Sustainable Development Goals

2001 年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された、2016 年から 2030 年までの国際目標のこと。持続可能な世界を実現するための 17 のゴール・169 のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) ことを誓っている。SDGs は開発途上国のみならず、先進国自身も取り組むユニバーサル (普遍的) なものであり、日本としても積極的に取り組んでいる。(外務省 HP より)



「プノンペンの奇跡」

プノンペン水道公社 (PPWSA) は、「無収水量率 (配水したのに漏水などのために水道料金を徴収できない水の割合)」を内戦終結直後の 72% (1993 年) から 8% (2003 年) に劇的に改善し、また 2005 年 5 月には蛇口から直接安全に水を飲める「飲用可能宣言」を行った。その驚くべき成果から、「プノンペンの奇跡」と称賛されている。この偉業は PPWSA と日本やフランスなどの国際支援により 10 年以上かけて達成したもので、JICA の書籍「プロジェクト・ヒストリー」シリーズ第 13 弾『プノンペンの奇跡 世界を驚かせたカンボジアの水道改革』として刊行されている。





カンボジアの 水と北九州市

カンボジア現代水道史へのかかわり

長い内戦の時代を経て、カンボジアが復興に向けて動き出した1993年。当時はあらゆるインフラが破壊され、ライフラインである水道も被害を受けてボロボロだった。プノンペンのプンブレック浄水場からの給水は1日に10時間程度で市内40%にしか及ばず、管路も老朽化していた。蛇口をひねれば濁ったような水が出てきて、白い衣服を洗濯すると生成り色に変わっていく。水が届かない地域では、水の入った大きなドラム缶を載せたリヤカーを大人や子どもが運んでくる。その水を、家の軒先のかめや水場のコンクリート製の水槽に入れて、柄杓で少しずつ大切にすくいながら洗濯物や食器洗い、水浴びをしていた。雨期になると、雨どいの下に大きなたらいやバケツを置いて水を溜めたり、はたまたシャンプーやせっけんを手にして天然のシャワーで頭や体を洗ったり。なかには市の水道管にこっそり給水管をつないで「盗水」をする人たちもいた…。そんな生活が「当たり前」だった。



水が入った大きなドラム缶をリヤカーに載せて運び、中の水を水がめに移す様子。時間と体力を要する重労働だが、水道の水が届かない地域では生活のために必要な作業の一つで、かつてはプノンペンでも日常的に見られる光景だった



改修後のプンブレック浄水場

この状況を改善しようと日本やフランス、世界銀行、アジア開発銀行などによるインフラ復興支援が動き出した。プンブレック浄水場の緊急改修、水道管の更新工事がスタートし、それに伴いその施設を運営する仕組みや、維持・管理する「ひと」づくりが必要となっていく。そこに名乗りを上げたのが日本の地方自治体である北九州市だ。1999年から市の職員をPPWSAに派遣して、現場の「需要」を把握しながら、日本にできることを提案していった。

派遣第1号となったのが、北九州市上下水道局の久保田和也さん。当時のカンボジアといえば、内戦、地雷、HIV、銃の蔓延といった「危険」というイメージしかなかった。そんな過酷な状況に果敢にも単身乗り込んだ技術畑の生粋の水道マンだ。言葉の違い、生活様式の違い、働き方の違いに苦労しながらも、カンボジアの水道マンたちの「きれいな水をみんなに届けたい」という熱い思いに感動し、悪戦苦闘の日々を送った。



カンボジア人技術者に指導を行う久保田和也さん（右上、2006年）

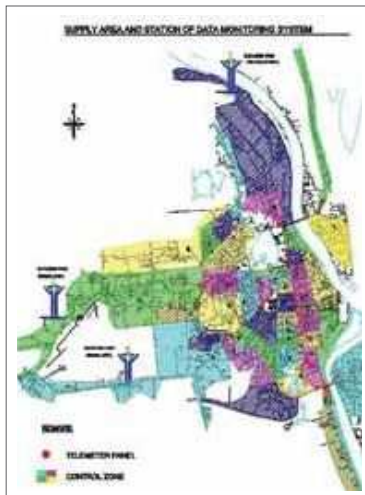
北九州市は何をしてきたのか？

「人づくり」が起こした ポンペンの奇跡 (フェーズ1：2003年～2006年)

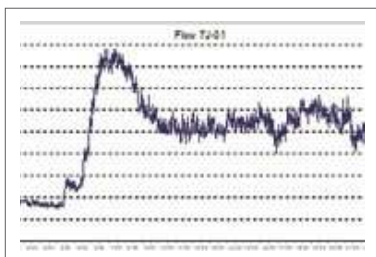
最初に北九州市が提案したのが、配水管網の維持管理の手法として同市で導入されていた「配水ブロック」と「配水監視システム」の技術移転だ。ポンペン市内の総延長約1,300 kmの配水管網を41のブロックに分け、ブロック単位で流量計と水圧計を設置し、1分ごとに測定・記録されたデータを、テレメータと呼ばれるシステムと電話回線を用いて中央の監視装置に転送。これで無収水量(漏水など)を算定し、数値の悪いブロックで漏水調査を実施することで、効率的な配水施設の維持管理を実現した。

その実績が評価され、2003年10月からJICA技術協力プロジェクトが北九州市上下水道局主導のもとで開始された。PPWSAを対象に、無収水量(漏水や盗水)の削減、安定給水、適正な浄水場運転、水質の向上、電気・機械設備の適正な維持管理を目標に、そこで働く「ひと」を育てる取り組みだ。OJTや日本での技術研修を重ね、カンボジアの水道マンたちの技術を向上させていく。浄水場の建設や施設の設置とは違い、長く、根気のある活動だが、その「ひと」を育てないことにはせっかく作った施設が無駄になってしまう。北九州市は率先してその「人づくり」を始めたのだ。

その結果、それぞれの目標は徐々に達成され、無収水量率は日本でも達成できれば優良事業体とされる8%以下にまで低減された。1993年当時と比較すると、目を見張るような実績が数値となって表れた。



配水管理ブロック



PPWSAの中央監視室で表示された配水流量グラフ



北九州市での研修で指導する高山一生さん(左から2人目)



電気設備維持管理指導を行う木山聡さん(2004年)

特に注目すべきが、PPWSAの経営安定化という成果だ。水道料金の回収率が高まったことから、2001年から水道料金を値上げしていないにもかかわらず経営は安定し、PPWSAが目標として掲げてきた「貧困層へのきれいな水の供給」を実現。貧困地域に無償で給水管を設置するなど、カンボジアの貧困削減対策に大きく貢献した。

このことはPPWSA職員の誇りとなった。アエク・ソンチャン前PPWSA総裁は、職員の意識改革、士気を高めることを怠らなかった。組織全体の目標を定め、それを達成したら給料をここまで上げる、そんなコミットメントを全職員の前で発表し、着実に実績を積みこくことで水道マン魂をくすぐっていったのだ。援助とは、協力する国だけが一方的に行うのでは成果は上がらない。そこで共に働く現地の人たちのやる気があってこそ、実現するものだ。



ポンプの維持管理について指導する加賀田勝敏さん(左、2005年)

ポンペンの水道公社の奇跡

事業方針	1993年	2006年
職員数 (1,000 給水戸数当たり)	22 人	4 人
給水能力 (m ³ / 日)	65,000	235,000
水道普及率	25%	90%
給水時間	10 時間	24 時間
平均給水圧力	0.2kgf/cm ²	2.5kgf/cm ²
給水戸数	26,881 戸	147,000 戸
無収水量率	72%	8%
水道料金納付率	48%	99.9%

PPWSAとともに地方展開

(フェーズ2：2007年～2012年)

ブノンペンで大きな成果を上げたプロジェクトは、次に地方に目を向けた。給水状況が深刻な公営の水道局を有する8つの都市(右図参照)で、2007年5月より施設の改修と人材育成を平行しながら展開することに。このプロジェクトでは、北九州市上下水道局職員のみならず、前のプロジェクトで成長したPPWSA職員が、地方の水道局に技術指導を行うという活動も伴った。

各都市の水道はそれぞれ事情が異なる。水源ひとつを見ても、地下水を水源とする都市、川の表流水を水源とする都市、海の近くで水源の確保が困難な都市とさまざまだ。



管路布設工事の指導をする廣渡博さん(右、2010年)



フェーズ2で対象となった地方8都市

つまり、地域ごとに浄水処理の方式、施設設計、維持管理の方法が異なってくる。それぞれの都市と向き合いながら状況を把握し、浄水、電気・機械、設計の専門家が北九州市のみならず、日本の各専門企業、別の自治体からも多く投入された。

プロジェクトスタート当時のチーフリーダーだった木山聡さんは、在任期間中に8つの都市を頻繁に回りながら、地域の特徴、事情を把握し、本体である北九州市上下水道局にあらゆる要請をし、JICA、厚生労働省と綿密な協議を重ね、そして日本の企業を巻き込んでいった。

その結果、プロジェクト対象の8つの州で24時間の配水と、無収水の削減、カンボジア国家水質基準を満たす水を給水することができるようになった。

健全な水道事業経営を目指して

(フェーズ3：2012年～2018年)

水道供給能力の向上を目指したフェーズ2のプロジェクトから、今度は自立発展的な経営ができるよう、経営人材を育成するプロジェクトが展開していくことになる。2012年11月より始まったこのフェーズ3のプロジェクトでは、地方8都市の水道局のみならず、その監督機関である鉱工業エネルギー省(現在の工業手工芸省)に対して、OJTや北九州市での研修を行った。経営・財政計画策定、企業会計、顧客情報管理、資産情報管理、施設の更新・運転維持管理計画、住民ニーズへの対応、市民啓発事業、水源の維持管理、人材育成計画など、すべて水道事業の経営管理面の能力を向上させるためのものだ。独立採算制の健全経営を目指して、多岐にわたる項目を徹底的に叩き込んだ。

フェーズ3のプロジェクト開始当初のチーフリーダーだったのが川崎孝之さん。「最初は、維持管理予算が確保されていないし、不確実な料金徴収体制や8都市中7都市で赤字決算だったりと、問題が山積みでした。それなのに各水道局から『問題はない』という答えが返ってくるのに衝撃を受けたのを今でもよく覚えています。まずは意識を変えなきゃ、ルールやシステムを統一して『見える化』しなきゃ



経営・財政計画策定指導を行う川崎孝之さん(左、2013年)

と、プロジェクトの中で何度も議論を行って方向性を模索しました」と、当時を振り返る。

このプロジェクトの特徴は、8都市のパフォーマンスを評価するために、基準となる指標を用いて定期的なモニタリングを行ったことだ。それにより、それぞれの水道局の未達分野が何なのか、その原因は何なのか、必要とされるのは予算か、努力か、人材か…など、対策について議論ができるようになった。

また、当時工業手工芸省の長官の立場であったアェク・ソンチャン氏は、活動を日本の専門家に任せきりにせず、自らが地方水道の現場を回る「プロヴィンシャルツアー」を実施した。この時ばかりは地方水道の局長以下、全職員の間にも緊張が走った。各水道局では、細かな現場の状況確認のあと、必ずワークショップを開催。課題の改善方法を明確にし、さらにプロジェクトでフォローするというサイクルが築かれていった。

こうした地道な努力の結果、2015年決算では、8都市すべての水道局が黒字決算を達成した。経営改善を通して利益を残し、再投資することによってさらにサービスを向上させるという、まさに持続可能な水道経営の第一歩を踏み出した瞬間だった。

その後、このプロジェクトは次の廣渡博チーフリーダーに引き継がれ、対象となる地方水道事業局は当初の8都市から13都市に拡大された。専門家たちはカンボジア全土を駆けずり回り、その技術・経営能力向上にあたってきた。

PPWSAに追いつけ、追い越せ。そんな思いで研修に励む各都市の職員たち。もちろん、それは簡単には達成できない大きな山だが、「Water for All = みんなのための水」というスローガンの実現と、カンボジア国家戦略開発計画で定める「2025年までに都市部での安全な水へのアクセス率100%達成」のために、プロジェクトが終わった2018年以降もその取り組みは続いている。

20周年おめでとう!

1999年に北九州市上下水道局が第1号の専門家を派遣してから今年で20周年。
これを記念してこの11月に、北九州で大規模な記念行事が行われました。

カンボジア水道界の錚々たる顔ぶれが北九州に集結!

1999年以来、のべ約130人の北九州市上下水道局職員がカンボジアに派遣され、カンボジアからのべ約90人が北九州市で研修を受けてきた。この長い人的交流は、簡単に成しえるものではない。日本の地方自治体として、現地に根を張った息の長い取り組みをしているのは稀といっても過言ではないだろう。

このカンボジアでの協力20周年を祝うために、2019年11月28日に日本・カンボジア水道フォーラムが開催された。カンボジアからは工業手工芸省のチャム・ブラシッド上級大臣、ウム・ソター工業手工芸省長官、シム・シターPPWSA 総裁など、カンボジア水道事業のトップリーダーが参加し、北九州市の北橋健治市長、村上幸一北九州市議会議長、有田仁志・株式会社北九州ウォーターサービス代表取締役社長らがカンボジア訪日団を迎えた。

フォーラムの冒頭で北橋市長は「北九州市は昨年、経済協力開発機構(OECD)から『SDGs推進に向けた世界のモデル都市』にアジアで初めて選定され、市を挙げてSDGsの推進に力を入れている。2025年までに都市部ですべての住民が安全な水にアクセスできるようになるというカンボジア政府の目標達成のために連携していきたい」と述べた。

一方チャム・ブラシッド大臣は、1999年の専門家派遣以来、北九州市の活動がプノンペンのみならず地方都市で大きな成果を導いたことに感謝を述べ、今後も北九州市、厚生労働省、外務省、JICAのみならず、民間企業の協力を求めたいと、強いメッセージを發した。

フォーラムには200人以上の水道事業機関・団体・企業関係者や学生らが参加し、カンボジアでの水ビジネスに大きな関心を寄せていた。



日本・カンボジア水道フォーラム及び市内研究施設の視察の様子。このほか、カンボジア訪日団は滞在期間中に市内の水道施設の視察、企業を訪問。日本の高い技術やノウハウをカンボジアに積極的に導入し、自国の水道セクターの更なる発展をもたらしたいとの大きな期待を寄せた

水道の仲間たちからのメッセージ

20年を共に歩んできた北九州市とカンボジアの水道マンたち。時にぶつかり、時に理解できず、時に共に涙し、時に肩を抱き合った「水道の仲間たち」からメッセージが届きました!

▼北九州の仲間たちより

私が派遣されたのは、2000年5月から2001年2月の9カ月間で、北九州市から2人目の派遣でした。当時は、日本人の数も多くなかったと思いますが、日本食の店も少なく食事に苦労した思い出があります。ニョニウムもまだ創刊されていなかったと記憶しています。2014年に13年ぶりに派遣されたのですが、日本食店も多く、治安も改善されているようで隔世の感を禁じえません。またその際、13年ぶりに再会したPPWSAのスタッフが私のことを覚えてくれて、非常に嬉しい気持ちになったのを覚えています。海外生活が初めての私が9カ月、何とか頑張れたのも、当時のPPWSAのスタッフがサポートしてくれたおかげだと思っています。これからも、北九州市とカンボジアの友好関係が続いていくことをお祈りいたします。(上田哲也)

私がカンボジアに初めて訪れたのが2009年で、それから早10年、現在は、妻子とともにカンボジアに移り住み、長期専門家として仕事をしています。次の20年に繋いでいけるように頑張ります!! (矢山将志)



人生初の海外が、水道の維持管理指導の仕事で、場所はカンボジアのカンボット。何もかもが初めての体験ではありましたが、それほど戸惑うことなく馴染めて、大変良い経験となりました。(宮下義幸)

カンボジアでの3年間で感じたことは、この国の人たちは前向きで、純粋で、真面目であるというのが率直な感想です。ただし、素直過ぎることもある気がしますが…(汗)。(平田健二郎)

The best way to find out if you can trust somebody is to trust them. (佐藤裕一郎)



通算半年間でしたが、公私ともにカンボジアを満喫させていただきました。仕事面では私の英語力のなさに苦労しましたが、少しでもお役に立てたのなら大変嬉しいです。毎朝飲んでいた屋台の練乳たっぷりコーヒーをときどき無性に飲みたくなります。(榮修一)

北九州市とともに、水の道を20年。 「友情」こそが原動力

長年にわたり北九州市とともにカンボジアの水道事業に取り組んできたアェク・ソンチャン前工業手工芸省長官・前 PPWSA 総裁が、長く続いた協力関係の神髄を語ってくださいました。

1999年に当時 PPWSA に派遣されていた久保田氏から誘いを受けて、北九州の地を初めて訪れました。その時、当時部長だった森一政氏（のちの北九州市上下水道局長）とカンボジアの水道セクターの復興について語り合いました。この「小さな出会い」が、当時思いもよらなかった協力事業の始まり。それ以来、木山、石井、川壽、廣渡という歴代の長期専門家とともに、あらゆる角度から直面する問題に取り組んできました。「成功の要因」をよく聞かれますが、PPWSA 側の自助努力と責任の精神に加え、北九州市上下水道局の皆さんとともに利他の精神で取り組んできたこと。それが大きな要因であったと、この歴史の生き証人であり、実際に昼夜ともに手を取り合い、苦楽を共にしてきた私は評価しています。この世は諸行無常です。しかし、私と北九州市の皆さんの友情は変わることなく、さらに深まり、その意味はますます大きくなっています。



アェク・ソンチャン
H.E. Ek Sonnchan
首相顧問／
前工業手工芸省長官・
前 PPWSA 総裁



スヴァイリエン州での夜間漏水調査の現場にて(中央)。北九州市から派遣された廣渡博さん(左から2人目)、カンボジアの水道局のスタッフたちとともに

人材育成プロジェクトのフェーズ2で指導した、月2回の管網給水栓残塩測定と塩素注入制御が、フェーズ2終了後も地方水道局のスタッフによって継続され、安全な水の供給に努めている姿を見た時非常にうれしく思いました。(加賀田勝敏)



3カ月の間に8都市を巡り、拙い知識・語学力でご迷惑をおかけしましたが、計器の修理や夜間の漏水調査等を現地の方と実施できたことは良い思い出です。様々な人が関わり、20年という長きにわたって築いた良好な関係を、今後も継続していただきたいと思います。(西田崇貞)

▼カンボジアの水道マンからのメッセージ！



北九州での研修時のひとコマ。充実した研修の後はみんなでカンバイ！



20周年にあたり長年の協力に心から感謝の意を表します。水事業に携わる私にとって北九州は“希望の地”。今後も北九州がカンボジアと日本をつなぐかけ橋であり続けることを願っています。(MIH技術・プロジェクト事業部部長 / Mr. SRENG Sokvung)

20年の歩み 1999-2019

1999-2002 ● 個別専門家派遣

2001 ● JICA 小規模開発パートナー事業
(現 JICA 草の根技術協力事業)
北九州市所有のテレメータ 31 基を供与して配水監視システムを構築

2003-2006 ● JICA 水道事業人材育成プロジェクト
(フェーズ1)
無収水量率の大幅な低減、2005年飲用可能宣言

2007-2012 ● JICA 水道事業人材育成プロジェクト
(フェーズ2)
対象8都市にて安全かつ安定的な水供給が可能に



左：管路管理について指導する竹田大悟さん(2009年)
右：水質分析の指導を行なう松本秀治さん(2010年)

◆ 2011 北九州市長が「友好勲章 大十字章」受勲、
水道局職員9名が「友好勲章 騎士章」受勲

北九州市長と、技術協力に従事した同市水道局職員9名にカンボジア政府より勲章が授与された

2013-2018 ● JICA 水道事業人材育成プロジェクト
(フェーズ3)

開始当初8都市中7都市が赤字であったが、2015年決算では8都市すべてが単年度黒字化。水道法制定に向けた支援など



左：料金徴収について指導する金子直哉さん(2013年)
右：施設更新計画の指導を行う深川拓哉さん(2015年)

◆ 2014 水道局職員2名が
「モニサラボン勲章」受勲

パタンバンでの協力に対し、石井秀雄さん(左)と木山聡さん(右)に勲章が授与された



2018 ~ ● JICA 水道行政管理能力向上プロジェクト
(~2022年7月まで)

工業手工芸省水道総局のガバナンス強化

水ビジネスの展開

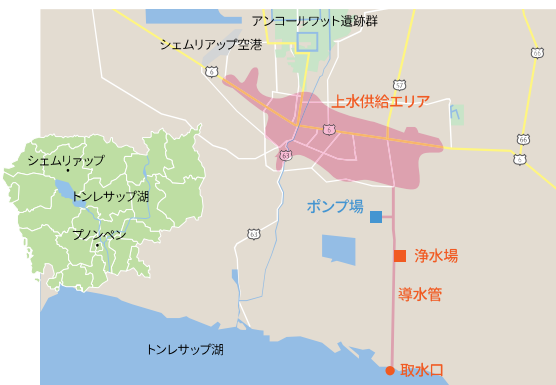
- 2010 ● 官民連携組織「北九州市海外水ビジネス推進協議会(KOWBA)」設立
- 2011 ● シェムリアップ市浄水場建設基本設計補完業務を受注
● 主要9都市の水道整備基本計画策定に係る覚書締結(鉱工業エネルギー省、北九州市)
- 2012 ● モンドルキリ州センモノロム市上水道整備事業を受注
● カンボット/ケップのPPP(官民連携)基礎調査を受注
● JICA無償;コンボンチャム/パタンバン上水道拡張整備計画準備調査を受注
- 2013 ● プノンペン市におけるJCM(二国間クレジット制度)案件形成支援事業を受注
● JICA無償;コンボンチャム/パタンバン上水道拡張計画を受注
- 2014 ● JICA無償;カンボット/シアヌークビル地方上水道拡張整備計画準備調査を受注
- 2015 ● JICA無償;カンボット上水道拡張計画を受注
● JICA円借款;シェムリアップ市水道拡張事業・詳細設計業務を受注
- 2016 ● カンボジアの水道事業の発展・普及に関する覚書を締結(工業手工芸省、北九州市、KOWBA)
- 2017 ● JICA無償;プルサット/スバイリエン上水道拡張整備計画準備調査を受注

未来へ。北九州市の新たな挑戦。

水道事業は終わりがありません。むしろ、時代のニーズに合わせてさまざまな形で展開していかなければならないからです。カンボジアのみならず、日本でも水道をめぐる変化は起きています。そんな世の流れの中で、北九州市はどんな展開をしていくのでしょうか。

2018年7月より北九州市上下水道局は、JICAの技術協力で新たに「水道行政管理能力向上プロジェクト」に乗り出した。2016年11月に行われた工業手工芸省組織改革に伴い「工業総局・水道部」から格上げされた「水道総局」を対象に、新規雇用職員的能力強化、事業管理、認可発行、規制・監督など、13の公社・公営水道局と民営水道事業者への規制・監督ができる能力を強化するのがプロジェクトの目的だ。特に、カンボジアの民営水道事業者は400以上に及ぶが、ライセンスを有するのは226社のみである。公的な予算が限られているカンボジアにおいては、民間企業の参画が不可欠だ。一方で、人々の生活や衛生に直結する水道事業には、明確な水質基準と、それを監督していく機能が必要である。

このプロジェクトには、北九州市上下水道局からの専門家に加え、日本の厚生労働省からチーフリーダーが派遣されている。国と地方自治体が手掛ける今後のプロジェクト展開に期待したい。



シェムリアップ水道拡張事業の計画図

一方で、少しさかのぼること2015年。北九州市は、シェムリアップ市に円借款で建設される上水道施設の設計業務の受注に日本の自治体として初めて成功した。このニュースは水道業界の歴史を塗り替えるほどのインパクトをもたらした。このプロジェクトは、これまで地下水を水源としていたシェムリアップにおいて、豊富な水を有するサップ湖を水源として変換し、1日当たり6万トンの水を供給できる水道施設（取水施設、導水施設、浄水施設、配水管施設）を建設するという壮大なプロジェクトだ。これにより、給水能力が格段に向上し、市民生活・衛生環境の改善をもたらすだけでなく、地下水くみ上げによる地盤沈下防止により遺跡群を保護し、観光産業・経済にも寄与できる。

この国際入札の応札に当たり、北九州市上下水道局は2010年に全国に先駆けて設立された官民連携による水ビジネス推進組織「北九州市海外水ビジネス推進協議会（KOWBA）」を会員企業とともに発足した。このほかにも北九州市上下水道局は2011年以降、JICAやカンボジア政府から水道事業関連のコンサルティング業務を受注し、これまで支援してきた8州都や、モンドルキリ州センモノロム市の水道整備などに携わってきた。単なる海外での協力事業から、新たに公共事業者が自ら、そして関連企業の先駆者となって水ビジネスを展開する体制を着々と積み上げている。現在、KOWBAの会員企業数は150社を超え、カンボジアやベトナムなどの東南アジア地域を中心に展示会参加やセミナー開催を積極的に行っており、その受注実績も着実に増加している。また、2016年1月には、工業手工芸省、北九州市、KOWBAでカンボジアの水道事業の発展・普及に関する覚書を締結し、さらなる協力を行うことになった。



地方民営水道の給水施設を視察する東幸毅さん（中央）と北九州市の専門家（2019年）

地方民営水道の施設を視察する矢山将志さん（右、2019年）



左：工業手工芸省、北九州市、KOWBAによる覚書締結（2016年）
右：カンボジア水道事業者連合会の展示会に出席（2019年）

とどまることを知らない北九州市の「しかけ」

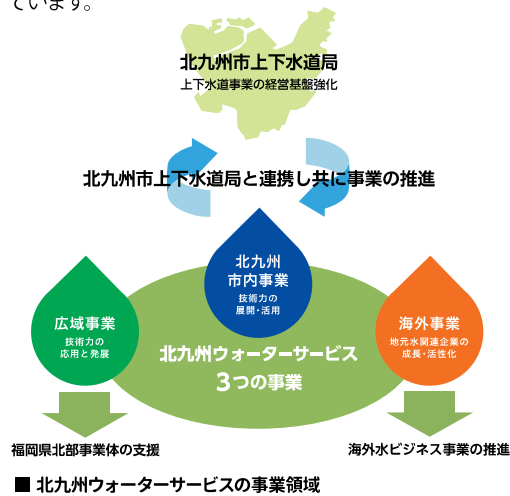
2015年12月、「株式会社北九州ウォーターサービス (KWS)」が設立されました。これは、北九州市上下水道局と民間企業の共同出資による「公民共同企業体」で、市内の水道事業に加え、広域事業、海外事業をより積極的かつ柔軟に、そしてスピーディーに展開できる北九州市の新たな武器です。有田仁志・代表取締役社長に、新たな時代の水道事業のあり方、その中での同社の立ち位置について話を聞きました。

先人が積み上げてきた叢智を活かして水ビジネスに貢献

日本の水道は、今まさに転換期を迎えています。人口減少に伴い料金収入は減少するものの、老朽化した施設更新による支出は増大しており、また必要な職員確保も難しく、困難な状況に直面しています。

同様に、カンボジア、特にプノンペンも、別の意味で転換期を迎えていると感じています。

急速な経済成長と急激な人口増加による水需要増大に伴い、さまざまな問題が発生していると聞いています。これまでの長年の経験と実績を活かして、株式会社北九州ウォーターサービス (KWS) はプノンペンの問題解決に向けた取り組みを行いたいと考えています。



11月28日に北九州市で開かれた日本・カンボジア水道フォーラムにて、工業手工芸省のチャム・プラシッド上級大臣(左)と



株式会社 北九州ウォーターサービス
代表取締役社長 有田仁志さん

また、海外水ビジネスでは特にスピードが重要だと痛感しています。即断即決は日本人の最も不得意とするところですが、KWSは、これまでの協力で得られた情報やニーズ、相手国との信頼関係や人的ネットワークをベースに、タイムリーに対応できると考えています。

KWSはこれまでに、カンボジア政府の要望に基づき、3件の水道施設整備に関する無償資金協力案件の提案を行ってきました。今後もカンボジアの水環境改善に積極的に取り組み、カンボジア政府の国家目標 CSDGs (2025年までに都市部給水普及率100%) と SDGs の目標達成に貢献していく所存です。



Photo: JICA / ISHIKAWA Masayori

さまざまな人があらゆる形で「水」に向き合う北九州市の取り組み。すべては「きれいな水を人々に届けたい」、その思いが起こした「形」である。この先、さらに20年、50年と、さまざまな変化を遂げながらも、これまで培ってきた絆を礎にカンボジアとともに歩んでいくことだろう。その先には「カンボジアの奇跡」があるのかもしれない。